

『ベルリンの風——統一ドイツの軌跡』

三 輪 晴 啓 著

一九八九年——日本では元号が昭和から平成に改まった年である。中国ではあの「天安門事件」が起こって、世界を震撼させた（六月）。そしてヨーロッパでは、フランス革命からちょうど二〇〇年という記念すべきこの年、新しい「革命」が起こった。同年十一月の「ベルリンの壁」の崩壊に端を発した激動である。

「壁」崩壊は東西ベルリンの分断に終止符を打っただけではない。東西ドイツの分割をも終わらせ、ドイツ（再）統一を四〇年ぶりに実現させた。さらにその余波は東欧各国の体制を変革させ、ソ連を解体させて、東西ヨーロッパの対立、ひいては東西世界の対立を解消させるにいたった。「鉄のカーテン」は取り払われ、第二次大戦後の世界を支配した「冷戦」秩序は、その幕を降ろしたのである。

この世界的大変革は、「革命」と呼ばれるに価しよう。この革命は一部の国（ルーマニアなど）を除いては平和裡に、つまり革命につきものの流血なしに遂行された。「無血革命」と呼ばれるゆえんでもある。

この「革命」はわたし自身にとっても、その後の人生を変えるほどの意義をもった。この大変革をドイツ・ヨーロッパの現地で身をもって体験したことによる。

発端はこの年の夏、それまで三〇年間つとめたNHKを退職する決

意をしたことだった。当時、テレビの受信料収入の頭打ちなどを理由に、NHKでも始められていたリストラに嫌気がさし、その先手を打ったつもりで、飛び出した。五十五歳の「早期定年退職者」に与えられた特典の一つ、半年間の「再就職準備休暇」なるものを取りあえず目いっぱい利用することにした。この特別有給休暇は「民放に出演」するなどの利敵行為（？）をしないかぎり、どこで何をしていてもよいという寛大なものだった。

「宮仕え」を辞めて「自由の身」になった記念に、シベリア横断鉄道によるヨーロッパ旅行を思い立った。飛行機でのヨーロッパ行きは何度も経験したが、いずれも仕事がらみだった。いまや仕事はなくなったが、時間だけはたっぷりある。ユーラシア大陸横断鉄道の「のんびり旅」は、自分自身へのささやかな慰労のつもりだった。

一九八九年八月、ロシア船で横浜港を発った。二日後、ナホトカに上陸し、長距離列車の客となる。シベリアのツンドラ地帯、バイカル湖畔などをゆっくり西進し、モスクワ、ワルシャワ、ベルリンを経て、二週間がかりでボンにたどりついた。

つてを頼って、ボン大学に客員研究員として在籍させてもらい、NHK在職中、報道記者などとしてかかわってきたドイツ・ヨーロッパの現代政治を学びなおし、将来にそなえるつもりだった。

その旅の途上で、すでに政治の激変ぶりを肌で感じた。ソ連ではゴルバチョフのペレストロイカが始まっており、自由の風潮が広がりはじめていた。たとえば、シベリア鉄道の車窓から駅も橋もトンネルも自由に撮影することができた（そんなことは、当時のどの旅行案内書

にも「軍事上の理由から厳禁」「違反者は厳罰」などと書かれていた。ポーランドに着くと、戦後初めての非共産党政権が選挙で誕生して、ワルシャワの街頭や公園で、青年たちと自由な政治談義を英・独語まじりで楽しむことができた。そして、ドイツでは東から西への脱出者が日を追って急増していた。

ハンガリーが「鉄のカーテン」を開け、オーストリアとの国境を開放したのがきっかけだった(五月)。夏のバカンスの名目で、ハンガリーの保養地に滞在していた東ドイツ市民が、この国境を大挙して越え、西へ逃亡し始めた。さらに西への脱出を求める東ドイツ市民がプラハやワルシャワの西ドイツ大使館、東ベルリンの西ドイツ代表部などの建物や敷地内に、それぞれ数千人規模で立て籠もった。複雑な交渉の結果、彼らも全員「追放」というかたちで西への移住許可を勝ち取った(八月九月)。

その後は、騎虎の勢いというのであろうか。大量の逃亡者という「出血」に加えて、内からも自由化、民主化を迫られ、追い詰められた東ドイツ政府は数か月後、ついに「ベルリンの壁」を開けて、西への旅行・移住を完全に自由化した(十一月)。ところが、その民主化要求はたちまち統一への要求にエスカレートし、壁崩壊からわずか一年足らずでドイツ統一が実現するにいたる(九〇年十月)。その間に東ドイツ経済の破綻、政治の行き詰まりが明らかにになり、統一は西ドイツへの「編入」、つまり事実上の吸収合併という屈辱的なかたちを取らざるをえなかった。

しかし、そのプロセス自体は——現象面で見ると——じつにド

ラマチックだった。東西ベルリン、東西ドイツを隔てていた壁や鉄条網が、毎日のように各所で破壊され、撤去され、新通路が開かれる。国境の監視塔も検問所も機能を停止し、人もクルマも自由に往来するようになる。電車や列車、地下鉄、バスの路線などが再び結ばれて、東西間の連絡運行を始める。それらの一つ一つの出来事に東西双方のドイツの人びとが歓声を上げ、抱擁を繰り返す感動と興奮の日々がつづいた。

わたしの半年間の滞在予定は、つぎつぎに延び、足かけ三年におよぶことになった。大学も宿舍もボンから、激動の中心地ベルリンに移して、この「革命」を追い続けた。壁崩壊をきっかけに降って沸いたような統一をめぐり、東西ベルリン、東西ドイツの動きを追ってドイツ各地を駆けまわっただけでなく、第二次大戦の対独戦勝四大国(米英仏ソ)と両ドイツとの複雑な折衝を追って、モスクワ、パリ、ローマ、ヘルシンキなどにも飛んだ。

戦後四十数年たっても、対独平和条約は結ばれていなかった。このため、戦勝四大国はいぜん「ドイツ問題」に関して、一部の権限を留保していた。その意味で、東西ドイツとも法的には完全な主権国家ではなかった。統一にあたっては、こうした国際的問題も解決されねばならず、両ドイツと四か国によるいわゆる「二プラス四」会談をはじめ、関係諸国による協議が繰り返された。なかでも領土問題では、対ポーランド国境の確定が焦点だったが、交渉の結果、現在の「オーデル・ナイセ線」をドイツが最終的に承認し、それ以东の旧領土の回復要求を明確に放棄して決着をみた。

『ベルリンの風——統一ドイツの軌跡』は、このドイツ滞在中に日本の新聞や雑誌に書き送ったものを中心に、その後、研究会などで発表した文章を加えたものである。上述のような激変、激動を、フリージャーナリストとして取材し、報道し、論評したものが主体だが、掲載紙の一つが週二回のペースで六〇回にわたって連載してくれたこともあって、統一のプロセスをかなり克明に伝えることができた。

ただ当時の記録ないし資料としては、それなりの意義があるのでは———と思い、勧められるままに一書にまとめてみた。激動のただ中に身を置いただけに、数々の貴重な体験ができた反面、いわば「台風の目」の中にあつて見落としたものも少なくない。後日、新資料が公開されて、初めて知った事実も多い。何よりも予測できなかったのは、壁に開いた一つの穴が、ベルリンという一つの都市を変えるにとどまらず、それがドイツを、ヨーロッパを、そして世界を変える爆薬の発火点と

新たな「革命」の発火点となった「一九八九年・ベルリン」。それは、わたしの終生のテーマになりそうだ。できれば、統一後一〇年のドイツ、つまり大世紀の変わり目にもなる西暦二〇〇〇年に、首都を移して「ベルリン共和国」として再生しようとするドイツを見据え、もう一度この「革命」の起因と推移、意義と影響などを考察し直してみたい。たぶんそれが、わたしのライフ・ワークになりそうである。

11-100H